

要旨

本発表は、日本語の外来語の出現率と意味用法を研究した金(2011)を参照し、独自に作成した韓国の新聞コーパスから、日韓とも増加傾向にあり抽象的意味を持つ「ケース」と「カード」について、韓国語の出現率と意味用法を確認した。その後、金(2011)の日本語データと比較した結果、「ケース」は、日韓とも1960年代に急増したが、1970年代からは日韓での出現率の格差が拡大していった。これは、日本語と韓国語で辞書的意味はほぼ同じであるものの、日本語の「ケース」は連体修飾節の用法が増え、これが基本語化するのに対して、韓国語は<경우(境遇)>の意味が主で、拡張が起こらなかったと考えられる。一方、「カード」は日韓で意味が異なる。この背景には、韓国語には<(政治や経済で)問題を解決するための決定的な方法>という意味を表す別語がないため、「カード」にこの意味が付与されるようになったのに対して、日本語には「切り札」という別語があることが考えられる。

1. はじめに

日本語と韓国語は、言語構造が類似しており(堀江, 2005)、ともに同じ漢字文化圏にあつて、西洋語の語彙を外来語として借用することから、日韓外来語の使用状況はほぼ同じであろうと予想される。しかし、現代の外来語を比較して見ると、韓国語より日本語の方が外来語の使用が多い。例えば、日本は外来語の「デパート」を多用するのに対して、韓国は漢語の「百貨店」を使用することが指摘されている(CHANG, 2016)。この背景には、韓国より日本の方が外来語の受容時期が早いということも関わろうが、西洋語が外来語として定着する過程において、何らかの違いがあったと考えられる。しかし、現代日韓外来語の違いが、定着過程のどこにどのように起因するのかを明らかにするためには、通時的なデータを利用して、定着過程での意味用法の変化を確認する必要がある。

そこで、本発表では、西洋語が取り入れられ、自国語の語彙として深く浸透していくその過程を「定着過程」と定義し、独自に作成した韓国語の新聞データと日本語に取り入れられた外来語について研究した金(2011)の報告に基づき、事例研究として「ケース」と「カード」を取り上げ、意味用法の点から日韓外来語の定着過程の違いについて分析することを目的とする。

2. 先行研究

まず、韓国における先行研究には、英語を原語とする外来語の受容によって韓国語の文法や意味に変化が生じたことを分析したJUNGほか(2005)や、『東亜日報歴史コーパス(1920年-2011年)』を構築して韓国語の語彙・文法の変化の状況などを提示したLEEほか(2014)がある。また、日本語と韓国語の均衡コーパスの語彙表(『現代日本語書き言葉均衡コーパス、(以下、BCCWJ)』と『現代国語使用頻度調査1・2』)を用いて、日韓の漢語や外来語の使用率を比較したCHANG(2016)がある。

一方、日本における研究は、韓国に比べ、やや進んでいると言えよう。1911年から2005年の新聞社説を用いて外来語の量的推移を明らかにすることで、その増加をS字カーブで説明した橋本(2010)や、20世紀後半の新聞データを用いて外来語の質的な分析を行い、外来語の基本語化を明らかにした金(2011)がある。

日本では、外来語の通時的な研究のためのコーパス構築や外来語の量的・質的研究がなされている。それに対して、韓国では、外来語の共時的な研究が多く、また、西洋由来の外来語よりも中国語から派生した漢語に関する研究が多い。これは、韓国語の通時的コーパスが非公開、または部分公開になっていることが多く、また、外来語研究のためのコーパス構築も行われていないため、韓国語の通時的な研究そのものを行うことが困難だからだと考えられる。韓国語の通時的コーパスが利用できなければ、本研究が目指す日韓外来語の通時的な対照研究を行うこともできない。

そこで、本発表では、①韓国語の通時的なデータを作成する、②作成したデータを用いて韓国の外来語の変遷を確認する、③日韓外来語の定着過程を比較分析する、この3点を目的とする。

3. 分析方法

3.1 韓国語コーパス作成

本節では、韓国語コーパスの作成方法について述べるが、その前に、比較する金(2011)の日本語のデータを紹介する。金(2011)では、『毎日新聞』を用いて1950年から2000年まで10年おきに毎月2日分、全体で1000万字を超える大規模なコーパスを構築した。その上で、外来語の増減の傾向を確認するために「増加傾向係数」を算出した後、通年度数30以上の外来語を選別して外来語の基本語化について分析を行った。これに倣って、本研究では韓国語のデータを作成した。金(2011)の日本語データと比較できるように、本研究では韓国新聞の『東亜日報』を利用するが、これは1920年代から現在にいたるまで発行されており、戦後直後からの外来語の出現率や意味用法が通時的に確認できると考えられる戦後、1945年以降からのデータを構築する。

今回、分析対象とするのは、1945年の12月から10年おきに1985年までの全5年間、各一ヶ月分のデータである。紙面の数が少ない1945年以外は、全体文字数はほぼ100万字程度であり、5年間の総文字数は400万字程度になる。1940年代に廃刊された『東亜日報』は1945年12月に復刊したが、戦後直後の韓国語の外来語の意味用法も確認するために、復刊時期である12月の記事から調査対象とする。記事は、基本的に全てを対象とするが、広告、小説、詩、また、英語会話のテキスト等は除外する。

3.2 コーパスの比較

この節では、金(2011)のデータと、筆者が作成した韓国の新聞データの分量を示しておきたい。

<表1-1>金(2001)による各年の文字数や外来語の延べ語数・異なり語数

年代	1950年	1960年	1970年	1980年	1991年	2000年
全体文字数	530,678	1,161,251	2,153,286	2,131,901	1,823,274	2,332,788
延べ語数	3,930	15,738	27,425	27,543	21,897	39,378
異なり語数	996	2,043	2,782	2,699	2,545	3,286

<表1-2>韓国の新聞データによる各年の文字数や外来語の延べ語数・異なり語数

年代	1945年	1955年	1965年	1975年	1985年
全体文字数	310,615	830,765	846,783	1,009,884	1,059,756
延べ語数	116	1,016	4,716	4,093	5,350
異なり語数	22	140	537	453	503

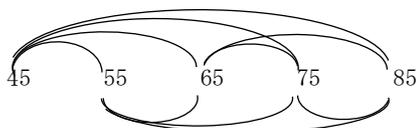
3.3 外来語抽出と選定

『東亜日報』は、新聞社のホームページで新聞紙面を pdf ファイルでダウンロードして利用した。PDF ファイルは OCR 処理が施されているため、PDF からテキストをそのままコピーすることで、新聞記事が抽出できる。

まず、テキストの整理には、秀丸エディタ(ver. 8.81)を利用した。現在、韓国語形態素分析には、形態素分析パッケージの「KoNLPy(ver. 0.5.1、韓国語情報処理のためのパイソンパッケージ)」があるが、1945年から1985年までの韓国語表記法は現在の表記法とは違うため、「KoNLPy」で形態素分析を実行すると、間違いが生じる可能性があるため、本稿では、各年の外来語は目視によって抽出した。

次に、秀丸エディタ(ver. 8.81)を利用し、データの全体文字数を確認した。年代別の総文字数には紙面の数や新聞構成の違いにより差があるため、1年ごとにほぼ100万字前後に合わせることにした。また、外来語の個別語の分析は金(2011)に従い「100万字当たりの外来語の出現度数(出現度数/総文字数×10⁶)」を求めて比較することにした。金(2011)では、通年度数30以上の外来語を選定して分析を

進めたが、本研究の韓国語のデータは、年代別ほぼ200万字程度である金(2011)の研究に比べ、規模がほぼ半分であることから、通年度数を15まで下げ、15以上の外来語を抽出し分析を行うこととした。このようにした算出した外来語の出現率を用いて、国立国語研究所(1987)に倣い、新>古なら+1点、新<古なら-1点で換算し、5年分を合計して、増減の傾向を増加傾向係数として算出する。



〈図1〉増加傾向係数の算出方法

金(2011)は、以下のように、増加傾向係数を5段階に区分している。金(2011)は『毎日新聞』を1950年から10年おきに2000年までを抽出した6年分の増加傾向係数を算出しているため、+15~-15の間の値をとり得るが、本研究の『東亜日報』の場合、1945年から10年おきに1985年までを抽出した5年間のデータであるため、+10~-10の間の値をとることになる。

〈表2〉増加傾向係数の5段階

区分	増減傾向	毎日新聞(金2011)	東亜日報(本研究)
区分1	増加	+15 ~ +8	+10 ~ +6
区分2	やや増加	+7 ~ +3	+5 ~ +2
区分3	変化なし	+2 ~ -2	+1 ~ -1
区分4	やや減少	-3 ~ -7	-2 ~ -5
区分5	減少	-8 ~ -15	-6 ~ -10

最後に、通年度数15以上の144語のうち、両方とも〈表2〉の区分1・2に当てはまる「増加傾向」にある語の中で具体名詞ではなく抽象名詞をランダムに抽出した。本発表では「ケース」と「カード」を取り上げ、分析を行う。以下は、「ケース」と「カード」の出現率である。ただし、金(2011)のデータのうち、本発表で用いるのは、韓国語との比較のために、1950年から1991年までとする。

〈表3-1〉「ケース」の出現率(金, 2011)

(日本)年代	1950年	1960年	1970年	1980年	1991年
出現度数	1	31	96	77	99
出現率	1.88	26.70	44.58	36.12	54.30

〈表3-2〉「케이스(ケース)」の出現率

(韓国)年代	1945年	1955年	1965年	1975年	1985年
出現度数	0	3	21	5	8
出現率	0.0	2.5	17.8	5.0	8.5

〈表4-1〉「カード」の出現率(金, 2011)

(日本)年代	1950年	1960年	1970年	1980年	1991年
出現度数	8	15	24	42	41
出現率	15.08	12.92	11.15	19.70	22.49

〈表4-2〉「카드(カード)」の出現率

(韓国)年代	1945年	1955年	1965年	1975年	1985年
出現度数	0	21	59	24	89
出現率	0.0	25.28	69.68	23.77	83.98

「ケース」の増加傾向係数は、日本は「8」、韓国は「6」であり、「カード」の場合は、日本は「4」、韓国は「6」で、少し差はあるが、両国とも増加傾向にあることを確認した。日韓とも増加傾向にあることから、量的にはある程度定着していることが確認されたが、質的には、すなわち、どの意味がどのように用いられているかについては、次章で分析する。

4. 分析結果

4.1 「ケース」

3.2の<表3-1>や<表3-2>で分かるように、日本語の「ケース」の出現率は1960年に増加し、その後もよく使用されていることが分かる。1970年に比べ、1980年に少し減少しているが、韓国語の出現率と比較してみると、極めて高いことが分かる。韓国語の場合、1965年には増加しているが、1975年には減少しており、1985年の出現率もかなり低いことが分かる。1960年代に増加することは日韓とも同じであるが、韓国語の「ケース」の使用が日本よりも少なく、その後の使用状況には大きな差があると考えられる。

次に、「ケース」の辞書的意味は、『デジタル大辞泉』では<個々の事例><場合>、『표준국어대사전(標準国語大辞典)』では<어떤 상황이나 사례(ある状況や事例)>であり、いくつかの辞書で確認した結果、日本語の場合は<事例><場合>が、韓国語の場合は<경우(境遇)><어떤 상황(ある状況)><사례(事例)>が一般的であることが分かる。辞書によって記述の内容が少し異なるが、一般に日本語の「場合」を韓国語に訳すと「경우(境遇)」になることから、日本と韓国ではほぼ同じ意味として使用されていることがわかる。以下は、東亜日報の用例から使用状況を確認したものである。全37件の中、同じ用法としての出現は除外として12例のみ、挙げられる。訳は筆者による。

- (1) 이와 같은 케이스에 대한 새로운 판결…(このようなケースについての新しい判決) 【1955】
- (2) 언론자유 의 본질과 한계에 대한 하나의 모델케이스로서…(言論自由の本質と限界についての一つのモデルケースとして) 【1955】
- (3) 法廷鬭爭을 벌인것은 이것이 첫 케이스. (法廷鬭爭を起こしたのはこれが初のケース) 【1965】
- (4) 모델케이스로 움직일 여성회관 소비조합이…(モデルケースで動く女性会館消費組合が…) 【1965】
- (5) 부속품導入케이스로해서 그나마 2백50%의 관세를…(付属品導入ケースにして、それだけでも250%の関税を…) 【1965】
- (6) 아마 건국이래 의혹사건으로서도 드문 케이스일거야(多分建国以来、疑惑事件として珍しいケースであろう) 【1965】
- (7) 개별케이스들을 면밀히 심사한후…(個別ケースを綿密に審査した後) 【1975】
- (8) 극소수의 케이스에 대해…(ごく少数のケースについて) 【1975】
- (9) 한국마라톤의 위치를 그대로 반영한 케이스였으며…(韓国マラソンの位置をそのまま反映したケースであって…) 【1975】
- (10) 국제기구에서 처음으로 공존하는 케이스가…(国際機構からはじめて共存するケースが…) 【1985】
- (11) 시범케이스로 지목한 韓國의…(示範ケースに指名した韓国の…) 【1985】
- (12) 재개발사업의 부작용을 대표적으로 보여준 케이스였다. (再開発事業の副作用を代表的に見せたケースであった。) 【1985】

金(2011)では「ケース」とその類義語との関係を確認することにより、「ケース」の用法が拡張し、基本語化していると説明している。「ケース」が最も多用される形式は連体修飾節における被修飾語としてであり、客観的同格連体名詞としてであることや、類義語の「事例」は合成語や名詞句が多く

「例」と「場合」は「ケース」と同様であることを述べている。次に、金(2011)での語例に基づき<表4>の東亜日報の語例を比較した結果、(1)は単独形式、(2)(4)(5)(7)(11)は複合語形式、(3)(6)(8)は名詞句における被修飾語、(9)(10)は連体修飾節構造であり、韓国語の使用状況は日本語と同じであることを確認した。しかし、単独形式が少ないことは日本語と同じであるが、それ以外の名詞句や連体修飾節構造などの形式の偏りは見当たらず、東亜日報の用例を見る限り、複合語形式が最も多いことが分かる。

韓国語の場合は「케이스(ケース)」よりは類義語の使用、特に「경우(境遇)」の使用が目立つ。日本語の「境遇」の意味は『デジタル大辞泉』によると<その人が置かれた、家庭環境・経済状態・人間関係などの状況>であり、韓国語での意味は『표준국어대사전(標準国語大辞典)』によると<어떤 조건 아래에 놓인 그때의 상황이나 형편(ある条件上に置かれた、その時の状況や都合)>である。日本語が「人」に注目している反面、韓国語は「ある条件」に注目している。また、上からも述べたように、日本語の「場合」は韓国語に訳すと「경우(境遇)」「케이스(ケース)」になるが、主に「경우(境遇)」として訳され、このことから、韓国語の<경우(境遇)>の意味領域が日本語より広いと言える。東亜日報の用例から「경우(境遇)」の出現率を算出して見ると、以下のようである。

<表5>『東亜日報』における「경우(境遇)」の出現率

韓国	1945年	1955年	1965年	1975年	1985年
出現率	1.2	74.8	176.0	381.0	547.0

<表5>から、韓国語の「境遇」の出現率が1955年から急増していることがわかる。また、3.3で述べたように「경우(境遇)」の増加傾向係数を算出すると「10」であることから、韓国語は外来語である「케이스(ケース)」より漢語である「경우(境遇)」の勢力が拡大していたと考えられる。

4.2 「カード」

3.2の<表4-1>や<表4-2>で分かるように、日本語の「カード」の出現率は1950年から1970年までは減少し1980年に少し増加していることが分かる。韓国語の場合、1965年に急増して1975年には減少、1985年にまた急増する傾向がみられる。韓国の新聞データが12月であるため「クリスマスカード」などの用例の出現が多いことを考えると、1955年から1975年までは少し増加して、1985年に急増していると言えるだろう。

次に、「カード」の辞書的意味を確認すると、日本語の場合は『デジタル大辞泉』『広辞苑』をまとめると<四角の紙・小型の厚紙><トランプ(札)><クレジットカードなどの略><試合の組み合わせ>が一般であるが、韓国語の場合は、『標準国語大辞典』『ヨンセ現代韓国語辞典』を確認してみると、日本語の意味以外に<方法や手段><(政治や経済で)問題を解決するための決定的な方法>などの意味が載せられている。辞書によって記述の内容は少し異なるが、日本語の辞書では記述されていない意味が、韓国語の辞書には記述されていることが分かる。以下は、韓国の新聞の用例から使用状況を確認したものである。全193件の中、同じ用法としての出現は除外して8例のみ、挙げられる。訳は筆者による。

(13) 위문문과 위문카드 또는 크리스마스카드(慰問文と慰問カード又はクリスマスカード) 【1955】

(14) 선수개개인에 대한 상세한 기록카드도 없이…(選手個人についての詳細な記録カードのなく…) 【1965】

(15) 병력카드도…진료안내카드도(病歴カードも…診療案内カードも) 【1975】

(16) 실업선발이 도전하는 빅카드다. (失業先発が挑戦するビックカードである。) 【1975】

(17) 히든카드가 무엇인지 조아려보면서… (ヒドゥンカードが何か考えながら…) 【1975】

- (18) 한번 꺼낸 카드를 도로 집어 넣지 말고… (一応出したカードを取り戻せずに・入れずに…) 【1985】
- (19) 상당히 양보한 카드를 최초로 던지시 제시했다는것은… (相当、譲ったカードを最初に、それとなく提示したというのは…) 【1985】
- (20) 협상카드가 구체적인 윤곽을 띠고 나타났던것은… (協商カードが具体的な輪郭で現れたのは…) 【1985】

1955年には<四角の紙・小型の厚紙>を意味する「クリスマスカード」や「慰問カード」が一般であり、出現した「카드(カード)」の用例はほぼ「クリスマスカード」である。1965年には「クリスマスカード」以外に、スポーツ選手の状況を書いてある「記録カード」が使用されている。1975年になると、1955年と1965年の語例が多く出現するが、その中「히DOWN카드」という例文が初めて出現する。「히DOWN카드」の全文脈は「이미 던져진 행운의 히DOWN카드가 무엇인지 조아려보면서 (もはや投げられた幸運の히DOWN카드が何か考えながら)」である。「히DOWN카드(히DOWN카드)」の辞書的意味は<誰にも見せないカード・最後の手段>の意味であり、日本語で訳すと「切り札」に近い意味になるが、1985年の「한번 꺼낸 카드를 도로 집어 넣지 말고(一応出したカードを取り戻せずに・入れずに)」の文脈上の意味も<最後の手段(切り札)として出したカードを>になる。1985年には、出現度数(延べ)89件の中、32件が(18)(19)(20)のように使用されていることを確認したが、ほぼ、政治・経済関連の記事でよく見られる。

現在、確認できる日本語の新聞通時コーパスがないため、話し言葉ではあるが、改まった場面での会話文である『国会会議録』を利用して用例を確認した。今回の発表では、国立国語研究所のひまわり『国会会議録』パッケージ (<https://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php>) の本会議録(1947年～2012年)を利用して用例を調査した。その結果、「グリーンカード」「利用者カード」などの例が多く<手段・方法>の意味を持つ「カード」の用例は、調査対象である1985年までの出現は見えず、1990年以降「交渉カード」(1998)、「外交カード」(2000)、「この圧力のカードを持つ」「経済協力という最終カード」(2004)などが出現する。2004年に出現した「経済協力という最終カード」のみ、韓国語の意味用法に当てはまると考えられる。

『国会会議録』で「카드(カード)」と同じ意味であると考えられる「切り札」を検索した結果、「最後の切り札をお出しになった方が」(1947)、「最後の切り札ともいうべき」(1972)、「自立経済の切り札として」(1998)などの使用が多く、その意味も韓国語の「카드(カード)」と同じ意味として使用されていることが分かる。韓国語の場合、「切り札」のように<最後に出す最も強力な手段><(政治や経済で)問題を解決するための決定的な方法>の意味を内包しているのは「최후의비책(最後の秘策)」や「비장의○○(秘蔵の○○)」であるが、この語は「카드(カード)」や日本語の「切り札」のように一つの語彙ではなく、意味も一致するとは言い難い。

5. 考察

以上、先行研究である金(2011)のデータと独自に作成した韓国新聞データを用いて「ケース」と「カード」の定着過程について、出現率と意味用法の分析を行った。「ケース」は日韓とも増加傾向で、同一の意味で使用されている。しかし、日本語は「ケース」と類義語との用法上の分担が見られ、「ケース」の連体修飾節が増加することにより「ケース」が基本語化するのに対して、韓国語は類義語の「경우(境遇)」が持つ意味用法の中に「케이스(ケース)」の意味用法が含まれており、その勢力により「케이스(ケース)」の意味用法の拡張はできなかったと考えられる。次に、「カード」は、日韓とも増加傾向にあるが、その意味は一致しない。韓国語の辞書的意味の特徴として日本語と異なる<方法や手段・方案>の意味がある。日本語には、この意味を表す語としては「切り札」があるが、韓国

語では「카드(カード)」以外にこの意味を表現できる単語がないため、韓国語では外来語である「카드(カード)」にこの意味を付与し、意味が拡張していったと考えられる。

以上のように、日本と韓国の外来語は、量的には同じ増加傾向にあっても、意味用法の定着過程が異なることが確認され、その定着過程を類義語の既存語との意味関係から、以下のパターンに分類できると考えられる。

- ①既存語の勢力により意味拡張が起こらないパターン(韓「케이스(ケース)」、日「カード」)
- ②既存語では表せない意味を表すように外来語の意味が拡張していくパターン(韓「카드(カード)」)
- ③類義語の既存語があるにも関わらず、既存語よりもその勢力を増していくパターン(日「ケース」)

6. 今後の課題

今回の調査では、1945年から1985年までの韓国語のデータを作成して「ケース」と「カード」について日韓外来語の定着過程を確認した。しかし、この時期だけでは、インターネット導入後である1990年代以降の外来語が現在に至るまでどのように変化してきたのか、年代ごとの外来語の定着過程における日韓の背景についての分析はできない。今後、2015年までデータを拡充し、戦後直後から現在に至るまでの全8年間のデータを用いて定着過程を確認することで、5章の①～③以外のパターンが見出されると予測し、さらに、外来語の用法の変化原因を言語内的要因と言語外的要因に分けることが可能であると考えられる。これは、今後の課題として残しておきたい。

【参考文献】

- 国立国語研究所(1987)「雑誌用語の変遷」『国立国語研究所報告』89、pp. 65-66.
- 堀江薫(2005)「日本語と韓国語の文法化の対照-原語類型論の観点から-」『日本語の研究』1-3、pp. 93-107.
- 田中牧郎(2006)「現代社会における外来語実態」『新「ことば」シリーズ19外来語と現代社会』東京：国立印刷局.
- 橋本和佳(2010)『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』ひつじ研究叢書(言語編)第86巻.
- 金愛蘭(2011)「20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」『阪大日本語研究』別冊3
- JUNG-YEONCHANほか(2005)「영어가 한국어에 미친 언어 문화적 영향에 대한 통시적 연구」『セハン英語英文学』第47巻1、pp. 185-225.
- LEE-YOUNGJAE・KANG-BUMMO(2014)「현대국어 역사 코퍼스를 이용한 언어 변화의 계량적 연구-가칭동아일보 역사 코퍼스에 기초한 접속부사 사용 분석을 중심으로-」『韓国学』63、pp. 267-303.
- CHANG-WONJAE(2016)「한일 양국어의 한자어 및 외래어의 분류와 특징」『日本語文学会』73、pp. 137-158.

【URL】

- 国立国語研究所、ひまわり『国会会議録』パッケージ、<https://www2.ninjal.ac.jp/lrc/index.php> (最終閲覧日：2019年10月10日)
- 『デジタル大辞泉』 <https://japanknowledge.com/> (最終閲覧日：2019年10月10日)
- 『広辞苑』 <https://sakura-paris.org/dict/> (最終閲覧日：2019年10月10日)
- 『표준국어대사전(標準国語大辞典)』 <https://stdict.korean.go.kr/main/main.do> (最終閲覧日：2019年10月10日)
- 『연세현대한국어사전(ヨンセ現代韓国語辞典)』 <https://ilis.yonsei.ac.kr/dic/> (最終閲覧日：2019年10月10日)